

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成18年
8月号

毎月23日発行
通巻432号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成18年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



信州安曇野 生駒市 大津美代子さん絵

昭和37年8月23日 月次祭法話より

住みやすい社会、自他の幸福を願って

法主 矢追 日聖(満51歳)

今月の十四日が、旧七月十五日の夏の
大祭でございました。生憎この日はお昼
頃から夕立があり停電になっておりまし
たので、法話は録音出来なかつたのでご
ざいます。
今日は、東光大祭の時の話や何か、自
分の思惑も交えてお話を申し上げたいと
思います。

清めの雨

大倭安宿苑が増設するにあたり、今日
は地鎮祭を行いました。お天気になって
良かったのですが、台風十三号の影響も
あったのか、やはり朝には、ちよつと雨
が降りました。地鎮祭をする直前におい
ても、少し塩を撒く程度の夕立があつて、
一、二回雷も鳴つたらしいんです。

東光大祭の時にも申し上げたと思いま
すが、これは何かしら天のお喜びになる
ところの現れ、あるいは、清めの雨、と
いうような意味、だろうと思えます。この
ような事は、いつも不思議に出来てい
るんですね。

靈しき鴉あや

大倭安宿苑がこの地に最初に出来たの
は、確か昭和三十年の十二月四日ござ
いました。太陽暦で換算しますと、この
日は金鶏の現れた日でありますので、大
倭におきましては、毎年金鶏祭として祭
典をしております。この金鶏とは、日本
書紀に出て来る金の鴉で、この地方は金

鶺鴒の土地であると言われている。金鶺鴒祥という事は、平和を意味する瑞祥が現れ、和を産み出す神様のお心が働いた日です。文字通り金色に輝いている鳥が飛んできて、神武天皇の弓弭に止まったとか、いや迷信であるとか今の人は解釈するんですが、これはそうじゃないんです。

日本書紀の文字を見ましても、「靈しき鶺鴒」と例えてあります。それは物質の動物ではない、つまり靈鶺鴒です。空中にもすごい光が現れ、皆が目を輝かすような不思議な光が現れたという事だと思えます。

和の精神の根本原因

大倭（※「ヤマト」と言っておられるが、『わらぎの黙示』の「日本精神の源流」では「大倭」と書いておられるのに従った）には饒速日命の系統である長曾根日子というスメラミコトがおりました。九州の日向から来られた五瀬命とか、弟である後の神武天皇の方は瓊瓊杵命の系統なんです。

元々この両者は同じ天孫民族で、兄さんの方は大倭地方におり、弟の方は日向高千穂の方へ行っているというように、親類関係みたいなものだったんですね。別に敵も味方もなく、本家分家のような形であると。それが段々と年月が下るに従って、両者が全く異民族であるような考え方を持ってきたと思われんです。

日本書紀は、何百年後かの奈良朝頃の人が書いておられます。靈感者の話もあれば、昔の語り伝えを聞いておる人の話もある。蘇我の乱の時に日本の古い記録は焼かれてしまったものもあります。が、当時まで何か文字で書いて残されたものもあ

った。それらを総合して作られているんです。神武天皇が大倭へお来しになる時に、「東にまき地有り。青山四方にめぐれり」という大倭の状況が九州で讚美されていたとあります。という事は、大倭と日向高千穂とは、常に何かしらの交通や連絡があったと思います。「国の最中か」と神武天皇はおっしゃっているんです。「六合の中心」とも書いてある。これは世界の中心という意味なんです。

大倭はくにもとであると言うのです。そこで、天業恢弘に天津日繼の仕事というものは、大倭でなければいかん、そういう意味合いにおいて、神武天皇は東の方へ移って来られた。

ところが大倭の方では、九州軍が天神の御子と偽って大倭の国を占領しに来たんだ、というのでいよいよ迎え撃つ事に衆議一決し、第一回は草香の激戦という事になったんです。

大和の方は軍備もあり文化も高いものですが、鎧袖一触で草香の戦いは九州軍が負け、可哀想に五瀬命もお隠れになったという状況でした。

第二回目は、南の方から再び入って来た時に、日本書紀によれば、「皇軍しきりに戦えども、取勝つこと能はず」と書いてありますから、九州軍の方は連戦連敗という事実だったと思います。

その時に、「天、俄かにかき曇り水雨降り、そして、靈しき鶺鴒が現れた」という事に記録ではなっているんです。その後、どっちが勝った負けたという事は日本書紀ではうたっていない。

武力でもって戦えば、九州の方は負けてしまい、大倭の方は勝つに決まっているんです。けれどもそこで、天の心が鶺鴒として現れた。お互いに戦いをする相手ではないというので、両軍そこで矛を収め、講和条約となったんです。

その時の事を日本書紀には、「天の羽羽矢と歩

鞆」という物が、天孫の証拠である印物のなんだという事でお互いに見せ合った。すると、長曾根日子命と神武天皇が持つておられた印物の両方の符丁が合致したので、神武天皇も顔を見合わせて、「事不虚なりけり」と言ったと書いてあるんです。そうした場合に、どっちが賊か味方か判らなくなっていました。同じ内輪同志の喧嘩であったという事になるんです。

そして両者の間で話が円満にいった。しかし、靈しき鶺鴒の光というのは神武天皇の方に輝いた。この神意は、大倭の天皇に就く天津日繼の資格は、九州から来た神武天皇の方にあるというので、長曾根日子命は、自から身を引くんです。

そして、皇后を大倭から立てるといっているので、三輪の方から媛踏輪五十鈴媛命を立て、日向の方が天皇になられた。言い換えれば大倭に婿養子に來られたという形になるんです。

勿論、神武天皇には九州におけるお妃の吾平津媛がおり、手研耳命という王子もおられたんです。その王子も皇后も退けて、大倭から皇后を迎えられた。今の人情からいうと実に残酷な話なんです。が、実力においては九州は負けたんですから、大倭の言い分を受け入れて、ここに新しい大和というものが出来上がった。これが大和の精神です。

和の精神は、金鶺鴒の発祥というものがその根本原因を作っているんです。金の鶺鴒が現れたという事、これは大いなる和の力によって新しい日本というものが、ここ大倭において生まれたという事になるんです。これはいつの時代でも大なり小なり繰り返していくものだと思います。

光明皇后の心

私はこの地に光明皇后の御意志を継いで、大倭

安宿苑やすかえんを創設する運びとなりました。

丁度、終戦の時に、「奈良朝において、施薬院、悲田院というような慈善事業をやったその気持ち、千二百年後の今日に、この場所において再現して欲しい」と光明皇后から言われたんです。

この心を継ぎましてから十年目の昭和三十年に、非常にめでたい金鵒発祥の記念日において、大倭安宿苑第一回の地鎮祭が執り行われたんです。それは相当寒い日でございました。そして、県の方も驚かれたと思うんですが、同じ月の二十三日の大祭（降誕祭）の時には、上棟式をやる事が出来ました。これは皆の真心と、またそこには光明皇后の心も働いたと思うんです。

それから新しい建物も増えまして、定員五十名名となったんですが、現在はそれを遥かにオーバーして、今の建物では足りなくなりました。

安宿苑は法人でありまして、社会事業の事ですから、国家とか県の補助を仰いで出来る事になっているんです。狭いので何とかして増やさなければいけないという実情に迫られていたのですが、予算の関係で出来なかつた。

そこで、今井富蔵苑長がそうした実情を県の方に行つて話されたところが、こつちが期待していないのに、不思議とトントン拍子に話が上手に進んだらしいんです。県相手の仕事ですから、今年から言つても二年か三年向こうで出来れば結構だなと思つておつたんですが、時機が熟したといひますか、もう話が決まつてしまつた。

これは良い方の意味において動いて来たと思ひます。この場合でも、我々が別に予期しなくても、神様から見て、もう造らせなければいけないと、必要に迫られて参りますと、別にやかましく言わなくても物は順調に運んで来る、これが常に申し上げている、「神ながらの味」なんです。

勿論、人間の努力は必要ですが、人間の理性を超越した不可解な世界において、何か我々がさせられているという感じを受けるんです。

この間から光明皇后も霊界においては非常にご機嫌がよろしいんです。どうも今年のご機嫌がいいから、何かいい事があるんだろうと思つていて、こういう事になって来たんですね。

もう一つ向こう側の谷に、県立で子供の精薄児の施設が今年度内に出来る事になっていきます。それも去る十六日に地鎮祭が行われました。隣に児童の施設が出来て来ると、いよいよもつて光明皇后の心というものが積極的に動いて来たんだと、私はつくづく感じて喜んでいきます。

大倭の社会福祉事業の場合

一つの趣味とか、事業の欲望で仕事をやる人もありますが、これは社会事業の事ですから儲けにはなりません。大倭の場合は、光明皇后という千二百年から前の古い精神というものが、この土地の上に動いているんですから、それを再現する意味で、我々は今動かしてもらつておるといふ気持ちでございます。つまり、社会事業であると同時に、その精神内容はどこまでも社会福祉の精神でやつていかなければいけない。

これは誰がやつてくれても結構なんです。何も我々の手によってやるとは決まつていない。光明皇后の精神に通ずる者が、この土地において社会福祉の仕事をする。そこに光明皇后の魂の喜ばれるところがあるんです。

善因善果であり悪因悪果なんですから、我々が善意を持つて社会福祉事業をやる場合には、その精神によつて、ここに居る人も必ず仕合せになつていかれるだろう。またこの事業に携わる皆も、

望まなくても自分達なりにそこに幸福をつかむ事が出来ると思うんです。

結局祈らなくても神様が守るといふ事ですね。

自分を治める

これは信仰の場合も同じ事でありまして。大倭の信者の方も、病氣や家計の事とか、色々な現実の問題によつて大倭の門を訪ねられるんですが、それを一つの動機として本当の信仰に入るといふ事が一番望ましいと思うんです。

これからの宗教は、理性の裏付けがなければいけない。ただ盲信だけではない。宗教というのは、まず自分の身を治めるといふ事ですね。

神様の道によつて、自分の体と心を自分で治めていくとは、「如何なる事があつても、悩まない、迷わない、驚かない、感情にとらわれない」といふような事です。仏教でいう煩惱を菩提というものに切り替えてしまう。いわゆる「煩惱即菩提」、「凡夫即仏身」と仏教では申すんですが、その言葉どおりなんです。これが出来れば、自分というものを自分で治めた事になり、それが本当の神様の心に通ずる事なんです。

けれども、我々のこの煩わしい世俗の事ですから、如何に達観し悟つたといつても、それはまた事に当たれば、迷いが生じ、悩みが生じてくる。

肉体を持つておる人間の事ですから致し方がない。そこで、もし事が起こつても、迷う時間や悩む時間をたとえなんぼかでも短くするように努力していく。そういう行き方が最高の宗教なんです。

また神様をお祭りするという事は、「まつろい」であります。「まつろい」「まつろい」といふ事は我々が順応帰一していく、手を合わせてついで行くという意味ですね。これは政治家がやつてお

る政治もまた祭り事の内に入るんです。神ながらのまにまに我々が生活していくという事です。

仏教と神道、共通の理想

現在の仏教を見ていきますと、あまりにもお寺なり僧侶というものが墮落しているから、今の仏教はダメだと一概に言われるんですが、仏教そのものは今も昔も変わらない。仏教の教理、哲学というものは、これはもう宗教の中では最高のものとは私は思っております。

日本で言う神ながらの道というものを、哲学でもって文字や言葉で言い表す場合には、仏教の言葉借りると非常に便利に説明出来るんです。神仏一体とか昔の人は言いました。

しかし今の人には、仏教と言ったら、お寺やお堂に偶像として祭られている木仏 金仏であり、神道といったら、千木(≡屋根の上の交差した木)とか鳥居を立てておる神社というように、形の物でもって別個のように考えられている。

宗教というものは、偶像とか形の物ではなく、要するに精神内容をもって我々が悟っていくものですから、仏教の哲学 教理というものと、日本の神ながらの道 教えというものは、その内容においては言葉こそ違いますけれども、殆んど一致しておるんです。そこでは神仏というものは一体だという事になってくる。私がここで神ながらの道をどれだけ説明しても、仏教から一步も出ないと思うんです。

昔はこれを両部神道と申しまして、仏教と神道を一本にして一つの教義を作っていた。例えば天台宗も両部であるんですね。神道も仏教も両方交じっている。真言宗や山岳宗教である修験道も

また両部なんです。だからお寺の隅っこに神様を祭って鎮守としてみたりね。

それが、明治の初め頃に廃仏毀釈がありまして、神道国学が勃興すると同時に、神道が非常に羽振りを利用して仏教を倒そうとした。そこで石の地藏さんとかを皆叩き割ったりという革命のような事があつたんです。

しかし裏を返せば、仏教も神道も宇宙の一つの法則を言い表している。その根本は、人間一人一人が修養し悟りをもっていく事ですね。

仏教の場合では人間一人一人が成仏して仏になる。正覚を得るといふ事になるんです。

神道の方でも、人間一人一人が神様の子なんです。神様となるところの素質を持つておるんですから、地上において天国のような世界を造っていくのが神様の理想であります。

結局、一人一人が神様なり仏様なりの道によって、お互いに自分というものを自分で治める事が出来れば、社会も非常に穏やかになっていく。自分が救われるという事は他人も救われているのですから、我々皆が住みやすい社会になっていく。

要するに、思いやりのある人情によって助け助けられ、また自分の幸福を願うと同時に他人の幸福も願う、そこに自他平等の麗しい世界というのが現れて来るんです。

大倭の宗教の根本問題

今の社会は、おおよそ宗教とは縁遠いのが現実なんです。欲でもって神様仏様を拝むというような者は何百万といるんです。これは自分個人の現世利益を得るがために手を合わせている。

でも悪質な宗教家はその裏をかくて、人間の弱みというものを巧みに捕らえて信者を増やし、ち

よつとでも賽銭を持つて来させるようにする。結局野心のある宗教家が名誉を持ち、自分の私腹を太らせようと人をおだてまくって信者を集めている。集まる者も自分個人の利欲のために集まっていく。そういう形態が今の宗教界の有様なんです。一般の人も信者の多い教団をもって、あそここの宗教は発展している、信者の少ないところはさっぱり潤わないというように見えています。そんな事を言うのと叱られるかもしれませんが。

私は思うんですよ、それは本當の宗教じゃない。それは欲張り亡者の集まりなんです。自分の利欲でもって手を合わせるような精神そのものが宗教精神に反しておるんです。また自分の宗教団体と、他の宗教団体とが信者の争奪戦をやり、他人の宗教の事を悪く言ったり、対立闘争しようというような精神を持つておる宗教団体そのものが、もう宗教ではないんです。私はそういう行き方をして

いる者を宗教とは認めません。本當の宗教は、お互いに神様の心、仏様の心というものを鏡として動いています。悪い人も良い人もいるんですから、人の事を悪く言うよりも、皆が調和し手をつないで共に仕合せになるようにしていかねばいけません。

そこで大倭は偉そうな事を言うようですが、我々はお互いに自分の身を治めると同時に、また社会の人皆も正しい宗教によって自らを治めていく。ここに社会福祉を中心とし、相互扶助によって出来上がった麗しく住みやすい社会をつくり、自分がその一員となろうと努力していくよう信仰していくのが、大倭の宗教の根本問題なんです。これは、世間の宗教が相入れないところの高級な行き方ですが、どうかこの点を良く理解して頂いて、そのおつもりで剛情な信仰を続けて欲しいと念願しています。

大倭あちらこちら(第16回) ボランティア「あじさいの箱」

ー26年を振り返ってー



昭和五十五年、ある会社の堺市家原寺の自宅で且田容子代表(当時40歳)は、父 森下新蔵さんが勤めておられた大倭安宿苑で、須加宮寮を建替えるのに借金のあることを知り、少しでも役立てばとボランティアグループを発足。「あじさいの箱」と命名し、社宅の仲間に料理の講習をして御礼の300円を箱に貯めて寄付をした事から始まりました。そのメンバーが現在も中心になって「楽しく、気楽に」をモットーに続いています。

その後、大阪で一流のプロから秘伝の味を教えるてもらい(代表の人脈あればこそ。異例のこと)、講習の輪が広がったのです。

その内、お好み焼の粉、ゴマ、下津の鰯の干物、キウイ、わかめなど各地の特産品を一括購入し、その代金から収益を寄付することも始まりました。地域も堺から大阪、奈良、御坊、海南、名張、泉北、彦根、宮津、生駒など広範囲に輪が広がりました。また奇贈品、



▲ 第3回 懇親会時の施設交流 (昭和61年3月)

特産品のバザーも各地で開催しました。昭和五十九年一月、第一回懇親会を大倭会館で開催しました。以後、毎年恒例となった懇親会には法主様もいつもご出席、お話をさせて頂きました。施設交流会でメンバーの同伴した子供たちは最初、住苑者に物怖じしていましたが段々慣れてきました。その子供たちも今では結婚して子供も出来、福祉関係に進んだ子供たちも沢山います。

チャリティサークルは昭和六十三年三月、故柴地則之氏のご協力で大倭殖産の三階をお借りして始まりました。発足会には法主様、鈴木カーさんにも出席頂いたことが懐かしく思い出されます。特技を生かし、サークル活動をして講師料を寄付するという良い方法です。書道、押絵、生花、着付け、社交ダンス、話し方教室、編み物、日本舞踊、体操、太極拳、歴史教室など賑やかに活動が始まりました。その当時お世話になった親切な先生方が思い出されます。このカルチャーサークルは「あじさいの箱」大輪の花が咲く」として読売新聞のコラム欄で紹介されました。作品や活動状況は定期的な発表会で皆さんに披露しています。

それを大倭病院の患者さんが見ておられ、平成十年、大倭病院との共催作品展が始まりました。周辺地域の皆さん方の発表会のような一面もあり、脳梗塞から復帰した患者さんなどが出品され、



▲ チャリティサークル発足会 (昭和63年2月)

生きがいになると大層喜ばれました。また、会員研鑽を図るため、黒田裕子氏の「がん患者へのケア 質の高い医療を目指そう」を始め講演会も何度か開催しました。

平成十二年には喫茶「和み」を開店し、皆さんの憩いの場が出来ました。共同購入の特産品もあります。その代金の一部を個人として寄付にあってるので、美味しいものが頂けてその上施設への支援にもなります。

また、あじさいの箱の心は「口で言うより目で教え」、親の背中を見て子供たちにも引き継がれていっています。法主様の言葉、「相互而敬愛」「みんな仲良く」……そんな心を今後も大切にしたいと思います。

今年の懇親会は三月二十五日、奈良の共済会館「やまと」で開催しました。各地から久しぶりの人も含め三十一人の参加があり、代表の挨拶、活動 会計報告、矢追美壽紀安宿苑理事長挨拶の後、楽しい食事と全員の近況報告、出し物等で盛り上がりその後奈良町散策を行いました。

且田容子代表のいつもの言葉、「健康で暮らせることに感謝して月に一日の労働奉仕を」の精神、初心を忘れず続けていきます。ご支援下さい!(湯浅芳郎記)



▲ 今年の懇親会 (平成18年3月)



不思議なご縁

滋賀県蒲生郡日野町

浅井 秀明



人生何が「ご縁」で変わるか分からない。僕が大倭紫陽花邑を初めて訪れたのは1987年の野草塾で、38歳の時だった。

20歳代後半から僕は自給自足を理想と考えていて、あちこち農地を探していた。野草塾も川口さんの自然農の話しを聞くつもりで参加した。この時からのご縁で以後大倭にはなんらかの行事に年一回以上は訪れるようになったが大倭訪問以前と以後の生活は激変した。どうしてこんなことになったのか自分でも良く分からない。

自然相手に静かな生活を実現したいと思って参加した野草塾は自然農だけではなしに原発問題や宗教もテーマになっていたようなのだが、参加するまではそんなことは眼中になかった。

ところが野草塾の講師の方々（川口由一、伊藤ルイ、高木仁三郎、宮田雪、山尾三省氏）のお話を聞いて何か引き込まれてゆく感じがした。それと石垣さんが法主さんのお話を聞いたらどうですかというので聞きに行った。法主さんのお話が始まった。不思議だった。全然力みがないのだ。おまけに信心しても御利益ないよ！と言われた。押しが強い宗教しか知らなかった僕はこんな宗教もあるのだと思った。こうして野草塾と大倭にかなり強烈な印象を受けて地元へ帰った。

それでも目指す方向が変わったわけではないの

で近くの農地を探して自給型自然農を始めようとするのだが何故か出来ない。そうこうしているうちに、僕の住んでいる日野町はびわこ空港の予定地になってしまった。

最初のうちは空港反対運動をするつもりはさらさらなかったが、反対派の集会に何となく顔を出してしまった。それがいけなかった。そこでは今にも反対派が負けそうな話しをしているので思わず、「そんな弱気で反対運動が出来るんですか？」と質問していた。しまったと思った。

案の上その集会の帰りに一人の若者が声をかけてきた。「僕らで一緒に反対運動しませんか？」といった。

それからは成り行きに任せて空港建設阻止委員会という団体を作って代表になり徹底的に反対運動に取り組むことになってしまった。

情報公開、立木トラスト、条例制定運動、異議申立て、住民監査請求、裁判と立て続けに攻撃を仕掛け、マスコミを味方にして暴れ回った。

1995年からはオンブズマンとしても活動を始めるようになり空港反対とオンブズマンが僕の活動の中心になった。そして2000年11月、遂に空港計画は凍結され長い戦いは勝利で終わった。

もう一つのオンブズマンのほうも活動開始から暫くすると官官接待、カラ出張など全国規模の運動が展開され、税金の無駄遣いを徹底的に追及する人たちが続々と出てきてその後確実に流れが変わった。

僕が係わってきた2つの運動が共に運良く一応の成果があがったことは、目に見えない世界の人

たちの後押しがあったからだと思っている。

ところで僕は人前で話すことが大嫌いだったが、やむを得ず壇上に立つことが度々あった。うまく話せなくてとても恥ずかしかったし能力のなさが悲しかった。でもどうしてもその役目から逃げられなかった。もう一つ文書作成も人前に出ることよりは少しでしたが、全く経験がなかった。

住民監査請求書や、訴状、準備書面、陳述書や反論書など目の前にすると途方に暮れてしまうのだが、どういう訳か書き始めるとすらすらと書けてしまう。一般的には行政相手の裁判では9割以上が勝てないといわれていたのに、8回闘って1回しか負けていない。あれやこれやで新聞やテレビに出たために多くの人から激励や相談、講演の依頼など次々と舞い込んで休む暇なく動き廻る生活が続いた。こんなことになろうとは夢にも思っていなかった僕は早く足を洗って逃げだそうとしたのだが……。

地元滋賀県には応援してくれる弁護士さんが居なくて困っていた。ところが昨年息子が司法試験に合格してオンブズ活動と福祉関係の弁護士を目指すと言い、今和歌山地裁で研修している。実は息子もFIWCや福祉関係から大倭にご縁を頂いていたことを後になって知った。親子共々大倭に繋がるご縁があった。ありがたいなと思う。

こうなったらもう逃げ出せない。静かな農の生活を夢見て大倭紫陽花邑を訪ねたつもりがとんでもないことになってしまったが、これも「神ながら」なのかも知れない。お陰で苦しみつつも充実した日々を過ごすことができ、今ではこの不思議なご縁に心から感謝している。それにしても大倭と言うところは鈍感な僕にはどうにもよくわからないが、とにかく不思議なところだと思う。

逍遥遊を求めて……

もつひとつの時間の巻

京都府舞鶴市 藤本 宏 秋

三月末、約八年勤めた居酒屋を退職した。四月、ずっと専業主婦をしていたカミさんが働きに出ることになり、長女は幼稚園に入園、私は二歳になったばかりの長男と共に、自宅で主夫をしながら新しい仕事をするようになった。

掃除 洗濯 炊事をしてる所から目の届く範囲で、長男はいろんな物で遊んでいる。何でも玩具にしてしまう能力はホントに素晴らしいが、区別がないのは困りもの。それから、散らかった玩具を片付けてスッキリしたと思っただ直後、また散らかして旧の木阿弥になるのは日常茶飯事。昼寝の時間もういりるので予定はいつも流動的。散歩に出ると気の向くまま、どこまででも歩いて行く。そういえば、養老孟司氏の本に「子どもは自然」と書いてあったなあ。子育ては親にとつて自然に添った生き方の修行と言えるかもしれない。主婦の気持ちや味わう毎日となった。

そんな暮らしが数ヶ月経過した頃から、急に様々な煩惱が渦巻き始めた。心模様の浮き沈みは激しく、空模様のようにコロコロ変わる。環境を変え、揺さぶりをかけたのは自分自身だが、どんな環境に身を置いても、今までの習慣や考え方の癖のようなものは変わらない。まさに「これが自分だと思っってしまった時から苦が生まれてくる」

(六月号 李章根記)ということがある。七月末、写真家 星野道夫氏を取り上げたテレビ番組を観た。ロシアのカムチャツカで熊に襲われ帰幽されたのが平成八年八月八日、今年でちよ

うど丸十年になる。アラスカを拠点にして、極北の動物達の営みやオーロラを撮った写真には、不思議と悠久なる時の流れを感じる事が出来る。「時々、遠くを見ること」をテーマに番組は進行していた。

その番組をきっかけに、星野氏が出演しているドキュメンタリー映画『地球交響曲第三番』のパンフレットを久しぶりに読み返した。

「目に見えないものに価値を置く社会の思想に、僕はたまらなく惹かれる」という言葉が目飛び込んで来て、反射的に大倭のことを思った。

大倭での様々な計画は、霊界での動きと現界での動きが相互に関連しながら決まっているようだ。その流れが時空を超えて繋がっていることを紫陽花邑に住んでいなくても感じる事が何度かあった。無計画の計画とは人間の浅はかな想像を遥かに超えているらしい。

私はその流れに添っているだろうか？ 多分、こんな疑問を持つこと自体、無計画の計画をわかつていないんだろうなあ。

すぐ近視眼的になり、決めつけという色眼鏡を掛けて見る癖。間違いのないやり方ばかり探して頭でつかちになり、一歩が踏み出せない癖。子どもや自然、大倭に流れるもうひとつの時間を感じながら、それらをどれだけ削いでいけるだろう。

「結果が、最初の思惑通りにならなくても、そこで過ごした時間は確実に存在する。そして、最後に意味を持つのは、結果ではなく、過ごしてしまっただけがえのないその時間である。——(中略)——何も生み出すことのない、ただ流れてゆく時を、大切にしたい。あわただしい、人間の日々の営みと平行して、もうひとつの時間が流れていることを、いつも心のどこかで感じていた。」(『旅をする木』星野道夫著 文春文庫より)

交差点 1

生駒市 川端 恭子

* 色んな人が行き交っている大橋。

そんな人達の声を聴いてみたいと思います。

私が大倭殖産株式会社に入社してから9年以上が経ちました。入社当初、3年はこの会社で頑張ろうと考えていたのが、気が付くと約3倍以上の月日が流れていました。

ここ2、3年で趣味と言えるまでになったものに、舞台鑑賞があります。きっかけはテレビで見ていたお笑い芸人を実際に自分の目で見てみたいと思っただけでした。生で本人達を見たという興奮と感動と、テレビで見ると面白かった事から、それ以来すっかり舞台の魅力にはまってしまうました。

お笑いだけに留まらず、ミュージカルや芝居、文楽、落語等々、気になれば何でも見に行き場を運ぶようになりました。基本的に興味があればどんな内容でも見に行きますが、特に好きなのは笑えるものです。

自分でチケットを取るのが面倒という方もいらつしやると思うのですが、私は結構好きです。

舞台を見ている間はすっかり日常を忘れてその世界にのめりこんでいます。その場でしか味わえない会場の一体感や、緊張感、同じ演目でも日によって同じ事が無いのも魅力です。

友達と見終わった後に同じところで感動したとか、笑ったとか、感想を言い合うのも楽しいのですが、気に入った台詞や動作を真似するのがすごく楽しくて、やっていると止められませんが、同じ趣味の友達と以前にも増して連絡を取り合うようになり、より親密になりました。

最近では月1、2回は舞台鑑賞に出掛けている位で、当分はこういう状態だと思います。

あじわい日誌

7月12日 午前中、神奈川県伊勢原市の自修館中等教育学校の生徒、男子5 女子3人が、修学旅行で来て、「交流の家」を見学。四日市から柳川義雄さんが来て、ハンセン病やワークキャンプについて話をしました。

7月15日 大倭神宮月次祭。

7月23日 大倭大本宮月次祭。

これに先立ち午後1時20分より教務本庁の2階において、「大倭の多宝塔」となる本庁の守護をされる「太郎坊大善神」「次郎坊大善神」二神のお社への入魂式が執り行われました。

4時から大倭会館で大倭会幹事会。東光大祭 祖霊祭関係、また今年から大倭会が主催することになった「弥栄おどり」等

について話し合われました。7月30日 午前8時から大倭墓地の大掃除、9時から境内地の大掃除が行われました。

杉本順一さんの話「掃除も終わりかけた頃、大倭病院の守護霊の東山坊大善神から塩をもってお社に来るように言われ、山崎夫妻と杉本一家が行きました。こんなことは初めての事。必要以上に木を切ってしまったのだろうかなど皆緊張した面持ちで色々考えながらお社に向かいました。見たところ私達が特に気付いた所はなかったように思ったのですが、「ナンジラココロミテ ナニヲ オモウカ」「クサモ ミナリ」と東山坊さんの声を感じました。

正直、そこまで考えて作業した人はどれほどいたでしょうか？早速、お社近くの木や草に謝りながら清めの塩を撒いたということがありました。こんな形で『いのち』を考える機会を頂いた事を、皆様にもお伝えします。

7月31日 大倭遺産の歓送迎会として西斎庭で焼肉パーティが行われ、「遊人会」も便乗して参加。今回急な呼びかけで参加者は多くなかったが、次回も楽しい企画をしたいとのこと。

8月1日 大倭病院設立19周年の記念日。午前10時より東山坊大善神の前でお祭りが行われました。

8月3日 F I W Cは交流の家に集合、周辺を大掃除して、翌4日、韓国キャンプに向け出発。8月3〜10日 栃木県の中野英樹さん来邑。昨夏、遊びに行かせてもらって超タノシカッタ昇ちゃん、夢よもう一度と顔を

見れば5分毎にアツビール。8月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

8月6日 午前8時15分（広島原爆投下の日）及び8月9日午前11時02分（長崎原爆投下の日）奈良市が呼びかける「平和の鐘の撞鐘」に合わせ、拝殿の太鼓が反保障臣さんによって打ち鳴らされました。

8月8日 東光大祭並びに祖霊祭。遠近各地から大勢がお参りされました。祭典後、4時半から大倭会館で、大倭会の呼び掛けで直会。多分、幽界からの参加者も喜ばれたでしょう、和やかな時が持たれました。台風7号は近畿からは逸れましたが、その雲で、残念ながら夕刻の月の出はありませんでした。

8月10日 午前中、拝殿右側の屋根にもたれるように倒れていた枯れ松の根がいよいよ枯れ終えたので、高橋良美 山崎正知さんによつて解体されました。「刃物を入れる前に枯れ松に3人で挨拶をしていると、キニモココロアリ コノキワ シメイヲオウルガ ツギニツナガルキヲ ソダテヨ」と法主さんの声を感じました」と杉本順一さんの話。

8月3日 天理大学からの実習生と、懐かしのメロディーを一緒に歌ったり指遊びのレクリエーションをしました。

8月5日 登美学園の夏祭りに多くの住苑者が参加。（長曾根寮）

7月14日 音楽クラブ／7月22日 喫茶倶楽部あじさい／7月27日 美容教室 等々、ボランティアさんの多くの支援を頂いています。（八重垣園）

7月20日 外出支援で、木津町相楽台の福寿園C H A 研究センター見学。

7月26日 俳句クラブ。「息子より米寿の祝黒日傘」

あんない

* 月次祭（大倭神宮）

9月6日（水） 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四五四回視会

9月10日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭（大倭神宮）

9月15日（金） 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭（大倭大本宮）

9月23日（祝） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第291回 大倭会文化行事

秋の一泊旅行のご案内

一瀬戸内海・吉備路を訪ねる一

皆さん、お誘い合わせてご参加下さい。

日時：平成18年10月29日（日）～30日（月）

行き先：岡山・瀬戸内海方面

（吉備津神社・大原美術館・備前焼き窯元など）

お泊り：鷺羽ハイランドホテル

鳥取市下津井吹上303-17 tel 086-479-9500

定員：50名程度

費用：28,000円

申込み：10月10日までに代金を添えて世話人へ

世話人：湯浅芳郎 tel 0742-48-3389

090-6987-5847

第18回 大倭会文化講演会

日時：平成18年11月12日（日）

午後2時より

場所：大倭紫陽花色 拜殿

講師：木村勝男さん

タイトル「生涯青春-ただ今、大学院生」

● 講師プロフィール ●

韓国から日本に渡ってきた両親の長男として1940年に島根県で生れた木村さんは、どん底の貧しさから出発して、逆境を糧にしなが、目を見張るような行動力と向上心で経営者としての成功をおさめられた。

現在、企業活動に取り組むと共に、大阪府立大学大学院で学んでいる。